

# コミュニケーション行為理論の論理構造 (上)

## The Logic in the Theory of Communicative Action

永井 彰

Akira Nagai

### 1 はじめに

J・ハーバマースの構想するコミュニケーション行為理論とは、いかなるものなのか。コミュニケーション行為理論はどのような諸概念から構築されており、そうした諸概念のあいだの連関はいかなるものとして設定されているのか。まず本稿では、ハーバマース理論を理解するにあたってその根幹にかかわるこうした論点をあらためて取りあげ、ハーバマースじしんの論理にそくして、これらの点を検討することにしたい。こうした基礎的な作業をつうじてコミュニケーション行為理論の構成を解明すること。このことを、ここでの第1の課題としたい。ついで、こうした基本的な論点の確認をふまえたうえで、ハーバマースの構想する現代社会の社会理論に、そうしたコミュニケーション行為理論の構成のあり方がいかなる特徴をきざみこんでいるのかを検討することにしたい。つまり、コミュニケーション行為理論の社会理論的なインプリケーションを明らかにすることが、ここでの第2の課題となる<sup>(1)</sup>。

現代社会をとらえる社会理論はいかなるものとして構成されなければならないのか。ハーバマースが『コミュニケーション行為の理論』(1981年)<sup>(2)</sup>で追究しようとしたのは、まさしくこの問いにほかならなかった。ハーバマースは、構造転換をとげたこの後期資本主義社会を十全にとらえる社会理論がみあたらないという基本認識のもとづき、みずからの手で現代社会の社会理論を構築しようとする。そうした社会理論のプログラムを呈示しようとしたのが、まさしく『コミュニケーション行為の理論』だったということができ

る。

ところで、現代社会の社会理論を構築していくにあたってハーバマースがその出発点としているのが、行為理論の再構成とでもいべき仕事である。ハーバマースの見地からすると、ウェーバー=パーソンズ流のこれまでの行為理論においては、目的活動(Zwecktätigkeit)としての行為を基軸として行為理論が組み立てられていた。つまり、さしあたっては孤立したものとしてとらえられた行為主体が客体へとはたらきかける行為を出発点として、行為理論が構築されていたというのである<sup>(3)</sup>。しかし、ハーバマースの観点からすれば、そのような行為のとらえ方では行為の社会性を十全には理論化しえず、それゆえ社会理論の基礎視角としては不十分なものととどまらざるをえない。ところで、このことは行為理論そのものの限界性をしめすできごととみなすべきなのだろうか。さらにはこのことから、行為理論的視角を放棄しなければならぬとの結論が、ただちに導きだされるのだろうか。周知のようにN・ルーマンもまた、ウェーバー=パーソンズ流の行為理論を基礎視角とするかぎり現代社会をとらえる社会理論を構築しえないとする点において、ハーバマースと基本的に認識を共有している。だが、この問題点を突破しようとする局面になると、ルーマンとハーバマースとはまったく異なった戦略をとることになる。というのもルーマンは、現代社会の社会理論を構築するにあたって、行為理論ではなく自己準拠的システム理論を基礎視角として選択するからである<sup>(4)</sup>。つまり、ルーマンの観点からすれば、ウェーバー=パーソンズ流の行為理論の限界はいわば行為理論そのものの限界であり、それゆえシステム理論へ

と社会理論の基礎視角をその根底から転換させなければならぬ。しかしハーバマースの観点からすれば、ウェーバー＝パーソンズ流の行為理論の限界はあくまでもウェーバーやパーソンズの問題であって、行為理論そのものの限界ではない。ハーバマースからすれば、行為理論の豊かな遺産をいかしつつ、それを社会理論の基礎視角として十分なものに練りあげていくことこそが、現代社会の社会理論を構築していくうえでの重要な理論的課題にほかならなかった。社会理論たりうる行為理論を構築すること。このことをハーバマースはみずからの課題としたのであり、そうした課題にこたえようとしたのが、コミュニケーション行為理論であったということが出来る。

ハーバマースからすれば、社会学の行為理論は、「社会的行為はいかにして可能か」という問いにこたえることをその課題としてきた。自我の行為と他我の行為とはいかにして整合されるのか。この行為整合への問いに社会学の行為理論は取り組んできたのである<sup>(5)</sup>。しかもこの問いは、「社会秩序はいかにして可能か」という問いを相互行為レベルで表現したものにほかならず、社会理論の根源的な課題に直結しているということが出来る。だがそのばあい、目的活動としての行為を原型として行為をとらえようとするかぎり、社会的行為を完全に理論化することができないのではないか。ハーバマースはこのように問題を提起する。つまり、そうした観点にたつかぎり、他者にたいして何らかの影響力を行使してしかるべき成果をえようとするタイプの社会的行為は視野におさめることができても、行為者のあいだの意思疎通にもとづき何ごとかをおこなおうとするタイプの社会的行為は射程に入っていないのではないか、というのである。もしそうだとするならば、目的活動としての行為を出発点として行為理論を構築しようとするかぎり、そうした行為理論は、「社会的行為はいかにして可能か」の問いに十全にこたえることができず、社会理論の基礎視角としては不十分なものとどまらざるをえない。それゆえハーバマースは、目的活動からコミュニケーション行為への行為理論のパラダイム転換を提唱する。ハーバマースからすれば、コミュニケーション行為こそが行為理論の出発点とされなければならないというのである。

ところでコミュニケーション行為理論は、複数の行為者間の意思疎通関係について分析をおこない、そうした分析を基軸として行為理論の展開をくわだてている。そうしてみると、コミュニケーション行為理論は、コミュニケーションにかんする分析をその重要な一部分としているのであり、その意味において、コミュニケーション行為理論は、コミュニケーションの理論でもあるということが出来る。このことに着目すれば、コミュニケーション理論として有効かどうかという側面からコミュニケーション行為理論の妥当性いかにを主題とすることもできよう。コミュニケーションというリアリティをどのように分析していくのかは、きわめて興味深いテーマでもあり、そうした観点からハーバマース理論の射程を検討の俎上にのぼすことが出来る。じじつ、そうした観点から数多くの検討がハーバマース理論にたいしておこなわれてきたし、そのさいハーバマースのコミュニケーション行為理論にみられるコミュニケーション把握が一面的であるとの批判も少なからずくわえられてきた<sup>(6)</sup>。ただ、われわれとしては、ハーバマースのコミュニケーション行為理論を正当に評価しうるためには、以下のような観点が不可欠であることを強調しておきたいと思う。コミュニケーション行為理論はハーバマースの構想する社会理論の基礎をなしており、ハーバマースの社会理論全体を方向づけている。そうしてみると、コミュニケーション行為理論をかれの社会理論全体のなかに位置づけ、コミュニケーション行為理論が社会理論の基礎視角としてはたして適切なかどうかこそが、まず検討されなければならない。社会理論の基礎視角として、いかなるコミュニケーション理論が構築されなければならないのか。まさしくこの問題関心からハーバマースはコミュニケーション行為理論を構築しようとしているのであって、コミュニケーションにかんする一般理論の構築それじたいはかれの目標ではない、という点を見誤ってはならないだろう。コミュニケーション行為から出発することによって、ハーバマースの社会理論はいかなる視座を獲得することができたのか。またそのことによって、ハーバマースの社会理論にはいかなる特徴がきざみこまれることになったのか。ハーバマースの理論を理

解するうえで重要なのは、このような論点であるように思われる。これらの点を解明することによってはじめて、コミュニケーション行為理論の社会理論的な意義を確認することができるし、コミュニケーション行為理論そのものについても、ハーバマースの論理にそくした理解をえることができるように思われる。

本稿では、こうした視座から、できるかぎりハーバマースじしんの論理にそくして、コミュニケーション行為理論の論理構造をつかみだすようにつとめたい。そこでまず、コミュニケーション行為を基点とする行為類型論について検討をくわえ、この行為類型論における基本的な論点がコミュニケーション行為と戦略的行為とに社会的行為を分けるその分類の仕方にあることをしめすことにしよう(第2節)。ついで、コミュニケーション行為と戦略的行為との区分についてさらに検討を深め、コミュニケーション行為の基本的特質とは何かについて解明することにしたい(第3節)。さらに、それまでの検討で確認されたことがらにもとづいて、コミュニケーション行為の下位類型について、整理をおこなうとともに、コミュニケーション行為の概念を理解するうえで重要ないくつかの論点について検討しておくことにしたい(第4節)。そして最後に、コミュニケーション行為理論がハーバマースの社会理論にたいしていかなるインプリケーションを有しているのかを明らかにしたい(第5節)。

## 2 行為類型論の設定

### (1) 行為類型論の呈示

ハーバマースは行為理論のパラダイム転換を提唱し、目的活動からコミュニケーション行為へと行為理論の鍵概念を移行させるべきことを提案している。(さしあたっては単独の)行為主体が客体

へとはたらきかける目的活動を原型にして行為をとらえるのではなく、複数の行為者のあいだでの意思疎通にもとづいて何らかのはたらきかけをおこなうコミュニケーション行為を原型として行為をとらえるべきだ、との提唱をハーバマースはおこなっている。ハーバマースからすれば、コミュニケーション行為を出発点とすることによってのみ、社会的行為の理論化をはかることができ、社会理論たりうる行為理論を構築することができる。以上のような観点からハーバマースは、コミュニケーション行為を準拠点とした行為類型論を設定している。ここではまず、ハーバマースが提唱するこの行為類型論の内容について、確認しておくことにしよう。

ハーバマースは行為というものを、道具的行為(instrumentelles Handeln)、戦略的行為(strategisches Handeln)およびコミュニケーション行為(kommunikatives Handeln)の三つの類型に分類し、表1の行為類型論を呈示している。

ハーバマースは、こうした三つの行為をさしあたり以下のように説明している<sup>(7)</sup>。

#### ①道具的行為

成果(Erfolg)に指向した行為のうち、行為の技術的規則にしたがうという側面がとりあげられ、状態とできごとの連関へと介入するさい、その効果の程度が評価されるというばあいの行為。

#### ②戦略的行為

成果に指向した行為のうち、合理的選択の規則にしたがうという側面がとりあげられ、合理的な相手のおこなう決定にたいして影響力を行使するさい、その効果の程度が評価されるというばあいの行為。

#### ③コミュニケーション行為

関与している行為者たちの行為計画が、自己

表1 ハーバマースの行為類型論

行為の状況 \ 行為の指向	成果に指向した	意思疎通に指向した
非社会的	道具的行為	—
社会的	戦略的行為	コミュニケーション行為

TKH, I, S.384. 邦訳(中)21頁、より作成。

中心的な成果計算をつうじて整合されているのではなく、意思疎通 (verständigung) の行為をつうじて整合されているばあいの行為。

ところで、表1をみると、行為というものを分類するにあたってハーバマースは二つの基準を導入していることがわかる。すなわち、まず第1には、行為状況が社会的かそうでないかという基準であり、第2には、行為が成果に指向しているかそれとも意思疎通に指向しているかという基準である。そこで、これらの基準について検討をくわえておくことにしよう。

まず第1の基準についてみると、ここでは、行為主体が自然へとはたらきかけて何らかの成果をえようとする道具的行為が、他者との社会関係のもとで何らかの成果を獲得しようとする戦略的行為やコミュニケーション行為と対比されている。道具的行為は社会的行為と結びつくことができるけれども、道具的行為そのものは社会的行為ではない<sup>(8)</sup>。これにたいして、戦略的行為やコミュニケーション行為はそれじたいが社会的行為である。そうしてみると、さしあたりここでは、他者との社会関係によって媒介されているかどうかに着目して、行為というものが分類されているということができよう。

ついで第2の基準についてみると、ここでは、成果に指向した行為としての道具的行為や戦略的行為が、意思疎通に指向した行為としてのコミュニケーション行為と対比されている<sup>(9)</sup>。ところでハーバマースによれば、成果という用語には次のようなインプリケーションがあるのだという。すなわち、行為者はその所与の状況において、目標に指向して行為することによってかれじしんにとって望ましい事態を因果的にひきおこすことができるわけだが、成果とは、そうした望ましい事態の出現のことにほかならないというのである<sup>(10)</sup>。そうしてみると、成果に指向した行為とは、そうした意味での成果の獲得をまず第一にめざす行為のことだということになる。このばあい、他者の意向にはかかわりなく、そうした成果の達成がめざされるという点に、このタイプの行為の特徴がみいだされる。それにたいして意思疎通に指向した行為というのは、他者とまず意思疎通をしよう

とし、そこで成立した相互了解にもとづいてはじめて、何らかの成果を獲得しようとする行為だということができる。このばあい、個々の行為者がはじめに設定した目標を一方的に達成しようとするわけでは決してない。行為者のあいだで成立した相互了解にもとづいてのみ、何らかの成果の獲得がめざされるという点に、意思疎通に指向した行為の特徴がみいだされる<sup>(11)</sup>。

ここで、道具的行為が成果に指向した行為だというのは、すぐに理解できることであろう。すでにみたとおり道具的行為とは、行為者がかれじしんにとって望ましい目標を設定し、それをめざして自然へとはたらきかける行為のことにほかならない。この行為は、さしあたっては他者との社会関係に媒介されていないため、成果の獲得をめざすということが行為の基本的な構造として明瞭に読み取ることができる。そうしてみると、論議の対象となりうるのは、社会的行為を成果に指向した行為としての戦略的行為と、意思疎通に指向した行為としてのコミュニケーション行為とに分類するその仕方だということになるだろう。ハーバマースからすれば、戦略的行為とコミュニケーション行為との違いは、さしあたり次のように説明することができよう。すなわち、戦略的行為のばあいには、ある行為者が設定した目標の達成のために他者を利用するということが想定されており、最初からしかるべき成果の獲得がめざされている。これにたいしてコミュニケーション行為のばあいには、まず行為者のあいだで意思疎通をしようとし、そこで成立した相互了解にもとづいてのみ何らかの成果を獲得しようとしている。ある行為者がいだいた目標を一方的に達成しようとするわけではないという点に、コミュニケーション行為の特徴があるとされているのである。

とりあえずここまでの説明をふまえて、道具的行為、戦略的行為およびコミュニケーション行為という三つの行為について、われわれなりに敷衍すれば、次のようにまとめることができよう。

#### ①道具的行為

(さしあたっては単独の)行為者が、自己の目標達成のために自然へとはたらきかけて何らかの成果を獲得しようとする行為。

## ②戦略的行為

ある行為者が、他の行為者の行為を自己の目標達成のための手段として利用しようとする行為。当の行為者は、他の行為者がどう行動するかを読み、そうした予期をふまえてどのようににはたらきかければ自分の目標を達成できるかを計算し、他者へと影響力を行使することをつうじて他者の側に何らかの行動を引き起こさせ、そのことによって行為者じしんにとって望ましい事態を生じさせようとする。

## ③コミュニケーション行為

行為者のあいだでまず意思疎通をしようとし、そこで成立した相互理解にもとづいて何らかの成果を獲得しようとする行為。

なおハーバマスは、道具的行為と戦略的行為という二つの類型の行為をあわせて、目的論的行為 (teleologisches Handeln) とも呼んでいる。まずハーバマスは、目的論的行為を次のように規定している。すなわち、目的論的行為をいとなむばあいの行為者は、ある所与の状況のなかで、成果を期待できる手段を選択し、適切なやり方でこの手段を用いることによって、かれにとって望ましい事態の出現を引き起こそうとする<sup>(12)</sup>。いまあげたこの規定は、さしあたり道具的行為のことを念頭においたものであるが、このモデルを拡張し、目標指向的に行為する(少なくとも)もう一人の行為者をこのモデルに組み込むことができるのであり、そのばあいには、戦略的行為もこの行為類型のなかに含まれることになる<sup>(13)</sup>。ともあれハーバマスのいうところの目的論的行為とは、道具的行為と戦略的行為の両方を含む概念だということを確認しておきたい。

## (2) 行為類型論の特徴

さてここまでの検討をふまえて、ハーバマスが構想するこうした行為類型論の特徴を列挙してみることにしよう。

まず第1に、この行為類型論の最大のポイントは、行為指向の違いによって、社会的行為を戦略的行為とコミュニケーション行為とに分類するという点にあるということが出来る<sup>(14)</sup>。すでにのべたとおり、道具的行為を成果に指向した行為と呼

ぶことには、何ら問題がない。行為者が自然へとはたらきかけるという行為からは、成果の獲得という構造を明瞭に読み取ることができるからである。これにたいして、他者との社会関係のもとでいとなまれる社会的行為のばあいには、事情が異なっている。戦略的行為のばあいには、ある行為者が成果の獲得をめざし、そのために他者の行為を利用しようとする。それにはたいしてコミュニケーション行為のばあいには、そうした成果の獲得を一方向的にめざすのではなく、関与する行為者のあいだでまず意思疎通をしようとし、そのうえで何らかの成果の獲得がめざされる。ハーバマス理論においては、戦略的行為とコミュニケーション行為とを区別する基準は、こうした行為指向の違いであるとされているわけである。

第2に、戦略的行為とコミュニケーション行為を分類するにあたっては、行為者じしんのパースペクティブが前提とされているということをおこ<sup>(15)</sup>。この点は、行為指向の違いによって行為を分類しようという第1の特徴と密接に関連しているのだが、ある行為が成果に指向しているのかそれとも意思疎通に指向しているのかは、関与者じしんの直観的知識にもとづいてのみ確認されるのだという。つまり、日常生活においてわれわれは、ある行為が成果に指向しているかそれとも意思疎通に指向しているかということをおこ<sup>(15)</sup>のうちに区別しているのであり、そうした区別を利用することによってのみ、戦略的行為とコミュニケーション行為とを区別することができるのである。そうした意味において、ここにおいては行為者じしんのパースペクティブが前提とされているのであり、観察者ないしは第三者のパースペクティブからでは、この区別は導入されえない。そうしてみると、日常生活のなかで自明なこととしておこなわれている区別を学的に再構成するというのが、ここでのハーバマスの方法だということができる。

第3に、ハーバマスは、これら三つの行為がまさしく「類型」であることを強調している。つまり、これらが類型である以上、行為というものはじっさいにこれら三つの類型に分類されうると主張しているのである<sup>(16)</sup>。この論点においても重要なのは、やはり戦略的行為とコミュニケーシ

ン行為との区別である。ハーバマースによれば、戦略的行為とコミュニケーション行為というのは、同一の行為の分析的な二側面というのでは決していない。個々の具体的な社会的行為は、戦略的行為かコミュニケーション行為かのいずれかに分類されうるのである。

第4に、成果の獲得ということそれじたいは、これら三つの行為のそれぞれに共通する契機となっているという点に注意しておきたい。そもそも道具的行為と戦略的行為とは成果の獲得をはじめからめざすものであるから、当然のことながら成果の獲得がその行為の契機となっている<sup>(17)</sup>。ここで見誤ってはならないのは、コミュニケーション行為にもまた成果の獲得という契機が含まれているということである。ハーバマースのいうコミュニケーション行為は、意思疎通の行為そのものではない<sup>(18)</sup>。コミュニケーション行為とは、関与する行為者のあいだで意思疎通をおこない、そこで成立した相互了解にもとづき何らかのはたらきかけをおこなう行為のことだとされている<sup>(19)</sup>。こうしたハーバマースの定義にもとづけば、コミュニケーション行為は、行為における意思疎通の側面と、成果を獲得しようとする目的活動の側面とを総合した概念だということができる<sup>(20)</sup>。もちろん、意思疎通をはかることそれじたいを目標にして行為をおこなうこともできるし、そうした行為もまたコミュニケーション行為のなかに含まれる<sup>(21)</sup>。しかし、コミュニケーション行為は、意思疎通の行為と同一でないものであり、ここではそのことを確認しておきたい。

第5に、それだからこそ、コミュニケーション行為を原型にして行為というものを考えなければならない、とハーバマースは主張するのである。コミュニケーション行為とは、行為における意思疎通の側面と目的活動の側面とを総合した概念である。もしこの概念を出発点としなければ、行為における意思疎通の側面を十全にとらえることはできない。目的活動としての行為を原型として行為をとらえてしまうと、行為というものは客体へのはたらきかけとしてのみ表象されることになり、そうした認識枠組を前提とすれば、他者への影響力行使としての戦略的行為はとらえられても、他者との意思疎通にもとづくコミュニケーション行

為はその視野に入っていないことになる。いっけんすると、客体へとはたらきかけて何らかの成果を獲得するというのは、すべての行為の原型であるかのようにもみえよう<sup>(22)</sup>。すでに確認したように、じっさいハーバマースの行為類型論においても、成果の獲得はすべての行為に共通する要因とされている。しかしながら、そうした目的活動を原型として行為をとらえてしまうと社会的行為の全域を理論化しえず、それゆえ目的活動を出発点としてはならない、というのがハーバマースの主張なのである。だからこそハーバマースは、行為理論のパラダイム転換を提唱し、目的活動からコミュニケーション行為へと行為理論の鍵概念を移行させようとするのである。

第6に、すでにこれまでの検討のなかでも触れられてもいるのだが、ここであらためて、ハーバマースのいうところのコミュニケーション行為はコミュニケーションそのものではない、という点を確認しておくことにしたい。しかもそのさい、コミュニケーション行為はコミュニケーションそのものではないということは、次のような二つの局面において明示化しておかなければならない。まず第1に、すでにのべたとおり、コミュニケーション行為は行為における意思疎通の側面と目的活動の側面とを含む概念だとされている。対象へのはたらきかけという要素を含むという点において、コミュニケーション行為はすでにコミュニケーションそのものとは異なっている。さらに第2には、他者へと何らかの情報を提供するといった一般的な意味でのコミュニケーションは、コミュニケーション行為ばかりでなく戦略的行為においても必要とされる<sup>(23)</sup>。他者に何らかの影響力行使をおこなおうとしても、もしコミュニケーションが成立しなければ、そうした影響力行使はそもそも成り立たないからである。こうした点からしても、コミュニケーションそのものとコミュニケーション行為とは峻別されなければならない。より精確に言えば、コミュニケーション行為において前提とされている意思疎通というものとコミュニケーションそのものとは、明確に区別されなければならない。そうしなければ、ハーバマースが意思疎通という概念にこめたインプリケーションを見落とすことになるだろう<sup>(24)</sup>。

そして第7に、こうした行為の類型論は、ハーバマースじしんの理論発展史のなかに位置づけてみれば、労働 (Arbeit) と相互行為 (Interaktion) という行為類型論を展開させたものだということができる。ハーバマースは『イデオロギーとしての技術と科学』(1968年)のなかで、人間が自然にたいしておこなう労働と、ひとびとのあいだの相互行為とを峻別すべきことを提案している<sup>(25)</sup>。そのさいハーバマースは、労働を目的合理的行為としてとらえたとうえで、それをシンボルに媒介された相互行為と対比させている<sup>(26)</sup>。ところで、ここで確認しておきたいのは、道具的行為、戦略的行為およびコミュニケーション行為という行為の類型論それじたいは、すでにこの時期において提起されていたということである。つまり、『イデオロギーとしての技術と科学』においては、労働というカテゴリーには道具的行為と戦略的行為が含まれるとされており、相互行為はコミュニケーション行為ともいいかえられているのである<sup>(27)</sup>。ただし、これらの行為を分類する基準は必ずしも明瞭だとはいえず、行為にかんするそのような記述は、あくまでも着想を呈示するというレヴェルにとどまっていたといわなければならない。現時点からふりかえてみると、この時期のハーバマース理論においては、コミュニケーション行為という概念に言語理論的な基礎づけが欠けており、そのため説得的な行為類型論を構築しえなかった、ということができるだろう。行為を三つに分類するというアイデアを首肯性のある行為類型論へときたえあげるためには、言語行為論にかんする検討をしたのでたのであり、そうした着想が実を結んだのが、『コミュニケーション行為の理論』だったということができる<sup>(28)</sup>。

ところで、このように検討をくわえてみると、社会的行為を戦略的行為とコミュニケーション行為とに分類するところに、この行為類型論の最大のポイントがあるということができる。じつは、こうしたハーバマースの分類の仕方がはたして妥当なのかどうかこそが、コミュニケーション行為理論そのものの妥当性いかに左右する重大な争点だということができる<sup>(29)</sup>。ハーバマースからすると、コミュニケーション行為理論の妥当性を主張しうするためには、まずこの社会的行為の類型論を根拠づけ、コミュニケーション行為の特徴づけ

を明示化しておくことが必要となる。ところでそのさい、ハーバマースの論理を妥当なものとして評価しうするためには、次のような疑念を晴らしておくことが不可欠だろう。すなわち、コミュニケーション行為もまた、戦略的行為と同様に一種の目的活動としてとらえられるのではないか、という疑念である。

すでに確認したとおり、ハーバマースのいうコミュニケーション行為の概念は、行為における意思疎通の側面と目的活動の側面とを綜合したものだとされている。つまり、コミュニケーション行為とは、関与する行為者のあいだで意思疎通をおこない、そこで成立した相互了解にもとづいて何らかのはたらきかけをおこなうことだとされているのである。そのさい、ハーバマースのこの論理が首肯性を有するためには、ハーバマースのいうところの意思疎通が目的活動には環元されえないということをしめす必要がある。というのも、意思疎通もまた一種の目的活動としてとらえるのであれば、コミュニケーション行為は行為における行為者間の目的活動と自然にたいする目的活動とを接続したことにすぎず、結局のところ目的活動そのものだということになるからである。かりにそうだとすれば、コミュニケーション行為も、意思疎通という媒介をへてはいるけれども、その基本的な構造において、戦略的行為や道具的行為と何ら変わらないものとしてとらえられうることになる。もしそのようにとらえてよいのであれば、ハーバマースの提唱する行為理論のパラダイム転換は、まったく無意味なものとして化してしまうにちがいない。というのも、かりにそうだとすれば、目的合理的行為を範型とする行為理論で何らさしつかえないからである。そうしてみると、意思疎通というものが目的活動には環元されえないことをしめし、コミュニケーション行為と戦略的行為との概念上の区別を明確にすることこそが、ハーバマースの理論戦略上きわめて重要だということができる。

コミュニケーション行為と戦略的行為との区別は、どのようにして根拠づけられるのか。コミュニケーション行為が目的活動には環元されえないということは、どのようにしてしめされうるのか。次にこうした点にかんするハーバマースの論議を検討し、コミュニケーション行為と戦略的行為と

の分類の仕方をより精確にとらえなおすことにしよう。

(つづく)

(ながい あきら 講師)

(1993. 1. 9 受理)

## 註

- (1) ハーバマースのコミュニケーション行為理論がいかなるものなのかということについては、すでに数多くの研究が公表されている。したがって、コミュニケーション行為理論の構成のあり方を検討するなどという課題は、すでに解決済みであるというべきなのかもしれない。しかしながら、少なくともわれわれがみるかぎりでは、そうしたこれまでの研究において、コミュニケーション行為理論が有する社会理論の基礎視角としてのインプリケーションにかんして、十分に検討しつくされているわけではないように思われる。だが、コミュニケーション行為理論をハーバマースじしんの論理にそくして理解するためには、そうした角度からの検討が不可欠だといわざるをえない。のちにもみるように、ハーバマースはあくまでも社会理論の基礎視角としての役割をはたしうる行為理論を構築するために、コミュニケーション行為理論を構想しているからである。本研究は、ハーバマース研究におけるそうした欠落部分を埋めることをめざしたものである。なおわれわれは、この課題意識からコミュニケーション行為理論の基本的特徴を解明しようとしたことがある。それについては、拙稿「コミュニケーション行為理論の戦略的課題」『社会学研究』第53号、東北社会学研究会、1988年、を参照されたい。本稿は、そこで提起した論点をより詳細に展開し、コミュニケーション行為理論の内実をより深く解明しようとしたものである。
- (2) J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Band I, II, Frankfurt am Main, 1981. (以下TKHと略記)。河上他訳『コミュニケーション的行為の理論』(上)、(中)、(下)、未来社、1985年、1986年、1987年。
- (3) ハーバマースによるウェーバー行為理論の特徴づけにかんしては、TKH, I, S. 377-384. 邦訳(中)、15-21頁、を参照されたい。また、ハーバマースによるパーソンズ行為理論の特徴づけにかんしては、TKH, II, S. 306-308. 邦訳(下)、139-141頁、を参照さ

れたい。

- (4) そうした立場からの社会理論の構想を明らかにしているのが、『社会システム』である。N. Luhmann, *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main, 1984.
- (5) J. Habermas, "Erläuterungen zum Begriff des kommunikativen Handelns", in *Vorstudien und Ergänzungen zum Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main, 1984, S. 571. (以下VEと略記)。
- (6) たとえば尾関周二氏は、言語的コミュニケーションと労働との内的で積極的なつながりについての考慮が弱いという点において、ハーバマースには基本的な弱点があると主張している(尾関周二『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店、1989年、19頁)。また、西阪仰氏や森元孝氏は、それぞれの立場から、コミュニケーション行為を語用論的に基礎づけようとするハーバマースの立論においては、コミュニケーションをとらえそこなうことになるとみている。こうした主張については、以下の論考を参照されたい。西阪仰「普遍語用論の周縁一発話行為論とハーバマース」(藤原・三島・木前編『ハーバマースと現代』新評論、1987年) 161-181頁。森元孝「どうして普遍的語用論だったか?—社会学的行為論からの誘惑—」『社会科学討究』第99号、早稲田大学社会科学研究所、1988年。同「コミュニケーション的行為の基本単位は可能か?」『社会学年誌』第31号、早稲田大学社会学会、1990年。
- (7) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、22頁。
- (8) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、22頁。
- (9) TKH, I, S. 386. 邦訳(中)、22頁。
- (10) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、21頁。
- (11) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、22頁。
- (12) TKH, I, S. 126f. 邦訳(上)、132頁。VE, S. 575.
- (13) TKH, I, S. 127. 邦訳(上)、132頁。VE, S. 576f.
- (14) TKH, I, S. 386. 邦訳(中)、22頁。
- (15) TKH, I, S. 386. 邦訳(中)、22-23頁。
- (16) TKH, I, S. 385f. 邦訳(中)、22-23頁。
- (17) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、22頁。
- (18) TKH, I, S. 151. 邦訳(上)、152頁。
- (19) TKH, I, S. 385. 邦訳(中)、22頁。
- (20) TKH, II, S. 193. 邦訳(下)、29頁。
- (21) ハーバマースは、そうした行為を会話(Konversation)と呼び、コミュニケーション行為の下位類型



の一つとして位置づけている (TKH, I, S. 438. 邦訳(中)、73頁)。

- (2) TKH, I, S. 150f. 邦訳(上)、151頁。  
 (3) VE, S. 602.  
 (4) この点については、次節でより詳細に検討することにしたい。  
 (5) J. Habermas, *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, Frankfurt am Main, 1968, S. 44-47, 62f. (以下 TWI と略記)。長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊国屋書店、1970年、39-41、59-61頁。  
 (6) TWI, S. 62f. 邦訳、59-60頁。  
 (7) TWI, S. 62f. 邦訳、59-60頁。  
 (8) じつは、ハーバマースが労働と相互行為とを区別したさいに問題だったのは、そのカテゴリー上のあいまいさだけではなかった。むしろより重大なのは、ハーバマースが労働と相互行為とを区別したうえで、社会というシステムは目的合理的行為が優勢であるか相互行為が優勢であるかにもとづいて区別されるとした点である (TWI, S. 63. 邦訳、61頁)。ここでハーバマースは、行為の類型と社会の類型とを直接的に結びつけたのだが、のちにかれじしんそれは誤りであったと自己批判している (J. Habermas, "Entgegnung", in A. Honneth und H. Joas (Hg.), *Kommunikatives Handeln*, Frankfurt am Main, 1986, S. 377-383.)。なお、『イデオロギーとしての技術と科学』におけるこうした問題点については、A. ホネットによっても指摘されている (A. Honneth, *Kritik der Macht*, Frankfurt am Main, 1989, S. 276-283. 河上倫逸監訳『権力の批判』法政大学出版局、1992年、316-324頁)。

ところでハーバマースは、『コミュニケーション行為の理論』においては、この点についての反省にもとづき、生活世界とシステムという二層的な社会概念を提出しているということが出来る。このことをふまえる

なら、『コミュニケーション行為の理論』における行為の類型論と社会の類型論とを無媒介的に結びつけようとする解釈は、少なくともハーバマースの意図には反しているといわなければならない。すなわち、生活世界にはコミュニケーション行為を、システムには戦略的行為を直接に対応させようとする解釈は、ハーバマースじしんの論理からすると、誤りだということになるだろう (Vgl. VE, S. 602-604.)。しかし、そうした解釈がひろく通用していることも、事実だと思われる。そうした解釈としては、たとえば以下のものを参照されたい。A. Honneth, *Kritik der Macht*, S. 320f. 邦訳、367頁。J. Berger, "Die Versprachlichung des Sakralen und die Entsprachlichung der Ökonomie", *Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 11, Heft 4, 1982, S. 360. 森元孝「システムと生活世界—ルーマンとハーバマース—」(藤原・三島・木前編、前掲書) 134-135頁。  
 (9) じつは、J. C. アレクザンダーや J. ベルガーは、こうした行為の区分の妥当性にかんして疑念を提出している。まずアレクザンダーは、理解 (understanding) も戦略的考量 (strategic consideration) もあらゆる行為の構成要素であることを強調し、コミュニケーション行為と戦略的行為との二分法は妥当でないとして主張する (J. C. Alexander, "Habermas's New Critical Theory: Its Promise and Problems", *American Journal of Sociology*, vol. 91-2, 1985, pp. 413-418.)。またベルガーは、コミュニケーション行為と戦略的行為とに具体的な行為が分類されることに疑念をさしはさむとともに、ハーバマース理論のなかではそのときどきにおいて、コミュニケーション行為と戦略的行為との境界線がゆれうごいてるのではないかとハーバマースを批判している (J. Berger, "Die Versprachlichung des Sakralen und die Entsprachlichung der Ökonomie", S. 359.)。